

論 説

歴史系博物館と教室の間 －いわゆる「博学連携」を実現するために－

国立歴史民俗博物館助教授

久留島 浩

はじめに

「博学連携について」というテーマで原稿依頼をされたとき、ある記憶がよみがえりました。10数年前、はじめて「はくがくれんけい」ということばを聞いたとき、すぐには何のことかわからなかったという経験です。漢字が思い浮かばなかったと言った方がよいのかもしれません。当時は、千葉大学教育学部で、日本史を教えるだけでなく、社会科教育という講義では、「学区の歴史をどのように教えるか」というテーマで授業をするなど、地域社会と学校の関係をどのように構築するか、考え始めていたころでした。教育学部に就職して10年近くなり、日本近世史の研究者となるためにやってきたことを、教員になる学生にそのまま伝えるだけではだめだと感じ始めていました。教育学部における「専門」とはなにか、についても考え始めていました。授業方法や指導案を教える能力も意思もないから、いずれ彼らが子どもたちに教えるであろう内容を教えるしかないのですが、近世史以外は詳しいことはわかりません。千葉県では中学校の社会科・高校の日本史の教員になる可能性はほとんど無かったので、とくに小学校で歴史的分野をどのように教えるか、就職した学生が悩んだときに必要な知識とはなにか、大学で習得すべきこととはなにか、について、なんとか考えようとしていた矢先でした。それなのに、この「はくがくれんけい」ということばにはとまどいました。それ以前にも、ことあるたびに博物館には行きましたし、博物館は好きな場所の一つでした。しかし、このときにはまだ、博物館の展示

を学校でどのように使うかということなどは、まったく考慮の外であったわけです。もっとも、それはわたしだけではなく、日本の博物館で「博学連携」が声高に言われ始めたのはこの数年ではないでしょう。

わたしは博物館の人間になって5年目です。「博学連携」について、日々実践していると言ってよいかと思います。このことばを使うかどうかは別として、この数年間で、学校教育との関係を考えない博物館は急速に少なくなっているはずです。学校でも、

おやこくす「国史」親子でクイズに挑戦！
土曜・日曜・祝日と夏・冬・春休み
やつてよ！
参加自由
参加無料（入館料が必要です）
さかぐんじ「企画展示」①男も女も装身具江戸から明治の技とデザイン 七月三日 迄 九月一日 迄
◆体験講座
「手作り」で「和」を愉しむ「江戸の製作」
第一回 七月八日（日）午後一時三十分より
第二回 八月五日（日）午後一時三十分より
②「中世寺院の姿とくらし」密教・禅・浄土
（一月一日 迄）一月四日（日）
③「新収蔵品の公開」一月五日 迄 二月六日 迄
④「日本の歴史」一月八日 迄 二月六日 迄
⑤「はくがくれんけい」の時代
三月八日 迄 三月八日（日）
◆体験コーナーがあるよ。
くらしのしくふつえんとく
べつまかく「くらしの歴史特別企画」
①ウリとヒョウタン 七月三日 迄
②九月一日 迄
③伝説の朝顔 八月六日 迄 八月二五日 迄
④伝説の古風 九月一日 迄
⑤冬の華ササカ 十一月四日 迄
十一月二四日 迄

くらしのしくふつえんたいけんきょうしつてん
の博物館体験教室 午後一時三十分より三十分の開催
①七月二日（土）竹くらし
②九月二日（土）イモはどこにある
③十一月六日（土）綿の正体
④一月八日（土）子どろがわかる植物
⑤三月五日（土）木は生ききている
申込書を送ってね。
保険料五〇円が必要。
しやせいかい「写生会」原博の展示物を
描いてみよう！
一月三日（土）祝、二四日（日）開催
申込書を送ってね。参加無料。
じゆうけんきょうしつてん「自由研究相談会」
夏休みの自由研究でなんでもやるのミニ
びんりのイベント。
八月三日（土）四日（日）、一〇日（土）、
一八日（土）、一七日（日）、一八日（日）開催
参加自由。参加無料。
れきはくぐにいいこうよ
れきはくぐにいいこうよ「歴史の先生と
一緒に歴史の
世界を探索するよ。ふだん見られない
ところを探索するかも！
毎月第一土曜日 午前一〇時 正午に開催
三回連続の講座だよ。参加無料。
参加申込書を送ってね。参加無料。



2002-2003



国立歴史民俗博物館
National Museum of Japanese History

【博物館】 開館時間 9月1日 9:30-17:00（入館は16:30まで）
9月3日から 9:30-16:30（入館は16:00まで）
入館料 一般420円/350円/高校・大学生250円/200円/小・中学生110円/90円
【<51の博物館>】 開館時間 9:30-16:30（入館は16:00まで）
入館料 小学生以上100円（50円）
◆（ ）内は20名以上の団体料金
◆企画展開館時間は別冊の案内があります
◆毎週土曜日は小・中学生、高校生は入館。入館無料
◆体験講座は手帳持参者は、手帳裏面に「はくがくれんけい」のスタンプを貼って入館。入館無料
休館（日） 毎週月曜日（休館・休日は休日のときは、その翌日が休館・休館です）
交 通 京成佐倉駅より徒歩15分/JR佐倉駅より徒歩15分
TEL 043-486-0123（代表）
FAX 043-486-4211
URL http://www.rekaku.jp/



「れきはいかにこうよ」教育プロジェクト活動報告

博物館の見学を有効なものにするための方策を考えていないところはないはずです。しかし、博物館では学芸員が、学校では教員が、それぞれ悩んでいるのが、実はこの「博学連携」のあり方ではないかと思えます。そこで、以下、これからの「博学連携」はどうあるべきかについて、わたしの現在の考えを率直に述べることにします。

ただし、わたしの勤務する国立歴史民俗博物館（以下、歴博と略）は、一般の歴史民俗系博物館とは趣を異にします。大学共同利用機関として、大学と同格の研究機関であるという側面を有し、総合研究大学院大学の日本歴史研究専攻（博士課程）も置かれています。いまのところ国立では唯一の歴史民俗系博物館ですが、上述の研究機関として獲得した研究成果をこの列島上に生きた人々の歴史や文化の「展示」に反映させることで、一般の「公衆」に伝えることが館の使命だとされてきたようです。したがって、「地域博物館」とは異なる使命を持っているはずです（その違いが館内の研究者にとってどの程度の共通理解になっているかは疑問ですが）。とりあえず、わたしが5年前に当館に移ったときに理解した当館の特色は以下の3点です。①この列島上に生きた人々の生活と文化とを展示によって示すことが主であり、いわゆる歴史的な有名人の果たした役割や政治的事件は扱わない（聖徳太子も秀吉もない！）、②高校で日本史を学んだ人が、自分の力で理解できる展示を目指すので、とくに学校団体に対しては館の側では特別な解説・ギャラリートークはしない（ガイドレシーバーが唯一の解説）、③千葉県佐倉市に所在するからといって、県・市の歴史をとくにとりあげることはしない（むしろ距離をおく）、ということです。①はいまなお大切な方針であると考えますが、②は意味がありません。その理



歴博ブックレット

由の一つは、高校で日本史が必修ではなくなったことです。したがって、一般来館者の「日本史の基礎知識」の基準がまったくわからなくなってしまったのです。二つは、そもそも高校卒業程度の日本史の知識を前提とするという設定自体の弊害ははっきりしたことです。事前指導を受けていない小学生にはもちろん、実は一般の成人にもよくわからない部分が多い展示なのです。それにもかかわらず、それを改善したり、わかるために何をするべきかについて考えるということがこの20年間まったくなされてきませんでした。③は地域博物館の使命との違いを考えると当然ですが、では佐倉のように美術館はあるが歴史民俗系の博物館が無いところでどうすればよいのでしょうか。「歴博友の会」のメンバーの多くは佐倉市民、千葉県民が占めています。企画展示のリピーターも、同様だと思います。佐倉市内の小学校では、ほぼ全校が当館を見学しています。千葉県・佐倉市近辺に関する展示はほとんどありませんから、地域博物館とは異なる見学プログラムが必要ですが、この点で館の見解ははっきりしていません。

このようななかで、1998年7月から「歴博の博物館活動と学校教育の関係を考え、試行するワーキング」が発足されました。その後ボランティアの導入についても検討することを依頼され、「教育プロジェクト」と改称して現在にいたっています。今年3月には、教育プロジェクトの編集で『れきはいかにこうよ—教育プロジェクト活動報告（3年間のあゆみ）』が刊行されましたので、詳しくはそちらを参照していただきたいのですが、依然「試行」段階であることには変わりありません。したがって、他とは異なった博物館で、しかも「試行」として認められているにすぎない実践を根拠とした私見であることは、あらかじめお断りしておきたいと思っています。



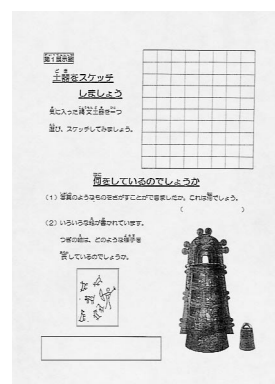
1 歴史民俗系博物館でどうすべきか

新学習指導要領での位置づけは、ますます「博学連携」を強化する方向にあります。そのために何が必要なのか、ほんとうに考えられているのでしょうか。多くの博物館では、今後の対応に苦慮しているに違いありません。公務員の数減らしが進行するなかで、学芸員数を削減する傾向はますます強まるはずですが、逆に学校からは博物館に期待するものが増えるということです。総合学習の問題も含めると、期待は大きいと言わざるをえません。しかし、これを受ける博物館の側はどうでしょうか。たしかに、「親しむ博物館づくり」という事業が文科省の支援で展開されていますが、そこで有効だと考えられた事業は長期的な人的保障なしでは継続できないものが多いことは明らかです。必要は理解しているが、人件費はつけないから、現有の人員でやりなさい、と言っているのに過ぎないと思われます。生涯学習を充実したり、地域社会と学校との関係をほんとうに有機的なものにすることが必要だと考えるならば、博物館が充実される意義は大きいはずなのですが、その充実のための予算はなかなか認められない、というのが日本の現状です。

その意味では、いま必要なのは、第一に、学芸員を「雑芸員」にしないことかもしれません。次世代に継承することが必要だと考えるものを調査・研究し、保存する手だてを講じるだけで、学芸員の手は一杯ですが、学校現場からは、学芸員から生徒に話してほしい、指導してほしいという希望が出されます。それにまじめに対応しようとすればするほど、わかりやすく新しい展示の「内容」をつくるだけの時間はなくなるのです。歴史系の博物館では、どうしてもストーリーが必要ですから、展示するだけの素材や内容がなくなり、新しいストーリーをつくることができなくなると、リピーターは来なくなり、先細りは避けられません。しかも、研究のための時間や、学芸員の研究に基づいた独自の展示のための費用をへらす一方で、観客数だけを評価基準とする傾向は、各地の自治体で強まりつつあります。博物館活動の面で先進的な諸外国でも、財政的に厳しい状況は同じですが、個人や企業の寄付行為が税制上優遇されているうえに、こうした文化的事業への寄付を名誉と考える文化的・歴史的風土の違いは大きく、公的資金のみで運営しなければならない日本の

博物館では、財政的にはさらに厳しい状況が続くはず。しかし、個々の学芸員が、展示のために調査・研究するための機会や条件を減少させては、先はないのです。この点は、一般には深刻に受け止められていませんが、そもそも学芸員の地位が先進的な諸外国の博物館に比して低い日本の博物館が抱えるもっとも深刻な問題です。

第二に、博物館による来館者調査・研究と来館者教育が必要だということです。上述したように、歴史的基礎知識の有無だけではなく、来館者には大きな幅があります。性別・年齢・価値観のちがいや身体的なハンディキャップの有無、日本語の理解という点でのハンディキャップの有無など、多様な来館者の実態をいかにつかむか、ということなしには、そもそも博物館が来館者に何を提供できるかわからないはず。生涯学習時代は黙っていて始まるわけではありません。多くの人に自分自身で「学ぶ」楽しさや課題を発見してもらうことが不可欠ですが、そのためのトレーニングは誰が、どこで行うのでしょうか。わたしは、これからの博物館は、「学ぶ」楽しさを知ってもらうために、さまざまなプログラムを用意すべきだと考えます。言い換えれば、博物館は来館者が「自分で学ぶ」楽しさを教えるところであるということになります。そのためには、ほんとうは来館者と展示とをつなぐ二つの役割の人々が不可欠です。一つは、来館者について調査・研究し、来館者が何を望んでいるのか、現在の展示でわかりにくいところはどこか、などを考える役割の人です（Evaluator）。もう一つは、さまざまな来館者に応じた見学のプログラムを準備し提供する役割の人です（Educator）。来館者が、博物館で「自己教育」をするのを支援すると言い換えてもよいでしょう。いずれも、日本では残念ながら専門の職業としてはまったく認知されていません。アメリカのメトロポリタン美術館では、教育関係のスタッフは約70名、イギリスの大英博物館で36名、フランスのルーブル美術館で40人前後だそうです。これにボランティアやインターンが加わるようですから、実数はさらに多くなります。いずれも多民族国家として、多文化をいかに共有するか、という問題を抱えているから、博物館など学校以外の場所での教育機能が肥大化しているとはいえ、もし「教育立国」を真剣に考えるのならば、この点は学ぶべきでしょう。これに比べて、歴博は、教育事業係が2人、週



親子クイズとワークシート

3回の研究支援推進員2人＝それぞれ小・中学校の経験者がいわば専任スタッフで、あとは研究部の教員がボランティアで「試行」しているのにすぎません。しかし、これとても他の一般の博物館よりは恵まれているかもしれません。学芸員による新しい研究成果を、展示という表現手段でわかりやすく来館者に伝えるためには、こうした二つの役割を果たす人が不可欠であると考えます。コンピューターグラフィックスなど、人手の要らない方向で展示技術は開発され続けるでしょうが、ほんとうに必要なのは、逆に人の問題です。博物館は、物言わぬ来館者が自学自習する所ではなく、人と人が議論したり交流したりしながら、自己教育していく場だと思うのです。教育とは人が人に人類の文化を継承していくことだとするならば、人の手間がかかる博物館こそがこれからの博物館だと思うのですが、いかがでしょうか。

2 学校では何をすべきか

では、学校の側では、何をすべきでしょうか。歴博での「試行」を通して、いくつかわかったことが

あります。この4年間、千葉大学教育学部社会科の一年生たちの歴博見学のためのプログラムを実施しています。歴史民俗系博物館の現状と展示の観方について説明したあと、実際の展示を観ながら、その観方を試してもらうというプログラムです。見学後に出してもらったレポートを分析した教育学部の後藤雅知氏によると、「はじめての博物館体験」が小学校のときで、それがいかにつまらなかったか、疲れたかという経験について触れている学生が少なくないそうです。将来、小学校の教員になる率の高い学生にして、こうなのです。あなた方が、将来子どもたちを連れてくるときに何をしたらよいのか、と問うと、まったくわからないと言います。しかし、それは学生のせいではないのかもしれませんが。ほんとうに博学連携をやるのであれば、大学で講義のなかにも組み込むことが不可欠だからです。一方、博物館の側では、先生のための講座にもっと力を入れるべきだと思います。歴博では、4年前から夏休みに「先生のための歴博講座」を実施してきました。多くの子どもたちにとって、「はじめての博物館体験」は、学校から集団で来るというものがもっとも多いわけです。それが、暗く、わからなく、疲れたものだとなると、博物館には将来はありません。学校からみんなで来る博物館体験をいかに演出するか、どのようなプログラムを準備するか、が博物館にとっての大きな課題なのです。と同時に、引率してくる先生の役割がきわめて重要です。事前見学（相談）・事前学習・見学・事後学習という流れをきちんとつくり、見学のときのプログラムをつくるのは、先生の側なのです。忙しいことは十分承知していますが、博物館と打ち合わせをどれくらい綿密に行うか、どのようなプログラムをつくるか（選択するか）がしっかりしていて、はじめて博物館見学が子ども

たちにとって、楽しいものになるのです。このような流れは、中学校でも高校でも同様です。高校生の団体での来館は決して多くはないのですが、昨年度から歴博協力校になって下さっている佐倉東高校の実践例から考えると、事前相談・事前学習がしっかりしていれば、見学効果は高くなるようです。昨年度は先生が展示物を前にして授業をすることもできました（この成果は、参考文献の遠山成一先生の実践をご覧ください）。展示物を前に、先生と生徒が議論する、生徒同士で議論する。まわりの観客の迷惑にならないように、という配慮は不可欠ですが、生徒が将来一人で展示を観て楽しむことができるような力を養うことに大きな意味があると思います。ついでに言うと、はじめての博物館体験は、「家族で」という事例が次に多いのだらうと考えています。そこで、歴博では、イギリスの博物館での実践を参考にしながら「親子クイズ」を実施してきました。当初は、長期休暇に限定していたのですが、現在では週休二日に合わせ、種類も、幼児向け（低学年まで）、二種類の小学校高学年向け（中学生も可）の三種類に増やしました。親子クイズは、とにかく展示物を少しでもじっくり観察してもらうことをねらいとしています。クイズには順番があるので、そのとおりにやっていくと、ある程度の時間で、まんべんなく展示場をまわることもできるわけです。しかも、親に渡す解説には、クイズをしたあと、親がさらに説明できるようにしてあるので、親も「知ったか(ぶり)」をすることができます。この会話を通じて、クイズを単なるクイズに終わらせないで、展示されているものについてじっくり見ることの知的楽しさを知るきっかけになればよいと考えています。

話を元に戻しますと、学校から来る子どもたちにとって先生の役割がきわめて重要だということですが、その前に先生自身に博物館をもっとよく知って、好きになってもらわないといけません。今年度、歴博では、佐倉市の教育委員会と共同で、二日間にわたって社会科と理科の先生の研修を実施しました。社会科の先生には、展示物で気に入ったものを二点、理科の先生には「くらしの植物苑」（歴博に併設されています）で、気に入った植物を二点、それぞれスケッチしていただきました。何人かの先生に、みんなの前で自分が描いたものについて「名付け」をしていただき、さらに気づいたことを話していただきました。そのあと、歴博の専門の研究者が、描い



佐倉市社会科教員研修の風景写真④単眼鏡でジオラマ（推定復元模型）を観る⑤「れきはくをかこうよ」というプログラムを先生が体験中⑥「れきはくをかこうよ」の成果報告風景

たものについてのコメント（見所を教える）をしました。これは、昨年度歴博で行った「れきはくをかこうよ」というプログラムと同じものですが、参加された先生の感想はきわめて好評でした。博物館の展示物を選んで絵に描くという、なんでもないプログラムですが、描いたあと、自分が描いたものについて名前をつけ、気づいたことを話すというところがミソです。すなわち、自分が描いたものを他人に見せ、その物から自分が引き出した情報を整理して伝えるという過程で、見る・描く・考える（感じる）という一連の作業のなかで、自分自身もその物から得た歴史像を確認することができるわけです。こうした経験が、子どもたちにとって10年後、20年後にどのような意味を持つのか、については追跡調査が必要ですが、何かしら自分自身の歴史像を獲得できているようです。いずれにしても、先生にも体験していただいて、はじめてプログラムの意義がわか



自由研究相談室

っていただけるのです。

なお、すでに述べたように博物館をとりまく状況は厳しいので、博物館からのほたらきかけを待っているだけでは始まりません。先生が博物館に行き、わからないところは学芸員に質問する、見学の前には必ず事前見学、事前相談を行う、ということを実践してはじめて、意義のある見学ができるのではないかと思います。また、そこできちんとした対応がとれない博物館は、結局生き残れないかもしれません。

おわりに

最近、岩城卓二氏が、「物言わぬ博物館」からの脱却を呼びかけていますが、博物館からの来館者への働きかけがその第1歩であることは間違いありません。はじめての来館者に、展示を観て考えたり、感じたりすることがいかに面白いかを体験してもらうことがポイントではないかと思います。展示の質を落とすのではなく、自分なりの展示の読み方を習得してもらうためには、来館者教育が不可欠で、そのためには来館者自体の調査・研究が不可欠だということです。生涯学習機関、社会教育機関としての博物館の役割は、まずこの点にあると考えます。少なくとも常に「来館者の目の高さに立って」展示を見直すことができれば、博物館は大きく変わるはずです。

ただし、日本では、教育担当のスタッフが決定的に不足しています。これからも増加する可能性はなさそうです。だからこそ、先生が、博物館ではミュージアムティーチャーになる位の覚悟が必要だと言わざるをえません。学芸員に「何かしてください」ではなく、このような見学にしたい、ここで自分が話したいがなにか補助材料はないか、というような積極性が必要だと思います。そのためにも、まず、先生が博物館の楽しみ方をマスターすることです。

「博学連携」という、気の遠くなるような課題は、結局ここから始めるしかないのだと考えています。

最後に、歴博では、日程さえあれば、事前相談以後のプログラムを使っていただけるようにしてあります。また、事前学習用のビデオの貸し出しやワークシートその他の提供をすることができます（高校用ではありませんが、興味のある方は、歴博内の「博物館活動推進室内教育プロジェクト」までFaxしてください（043-486-4211））。なお、国立のある高校では、沖縄への修学旅行の前に、歴博の民俗展示を観ていくようです。日程があれば、沖縄のことを研究している歴博教員の講義を聞くこともあります。くらしの植物苑と組み合わせると、自然や環境と人間の歴史との関係を考える総合学習のテーマになる可能性もあります。それぞれの学校の状況や生徒の問題関心にあわせた、独自のプログラムを一緒につくりませんか。

【参考文献】

- ・伊藤寿朗『市民のなかの博物館』吉川弘文館、1993年（古典的になっているが、新しい博物館の役割についての提言は刺激的です）
- ・歴史学と博物館のあり方を考える会設立十周年記念誌『現場から』2001年3月（購入問い合わせは八尾市立歴史民俗博物館 小谷利明 tel 0729-41-3601）
- ・久留島「これからの歴史系博物館について」（『21世紀の文化行政』、名著出版、2001年）
- ・歴博教育プロジェクト編『れきはくにいこうよー教育プロジェクト活動報告（3年間のあゆみ）』（1998年ー2000年）非売品ですが、歴博の久留島あてにファックスをいただければ、貸し出します（fax 043-486-4299）
- ・岩城卓二「対話する博物館ー歴史学と博物館のあり方を考える会設立十周年記念誌『現場から』に接してー」『ヒストリア』179号、2002年
- ・千葉県高等学校教育研究会歴史部会編『博物館に学ぶちばの歴史』山川出版社、2002年（遠山成一氏の歴博展示を使った実践授業の記録〈佐倉東高校〉が収録）
- ・このほか、ミュージアムマガジン『ドーム』が、博物館教育についてもっとも詳しい情報を伝えています。
- ・なお、地域の博物館では、「博学連携」のすぐれた実践をしているところも多いので、実際に行ったときにその学芸員にどのようなことをやっているかぜひ聞いて下さい。

国立歴史民俗博物館

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地

TEL 043-486-0123（代表）

れきはくホームページ <http://www.rekihaku.ac.jp/>